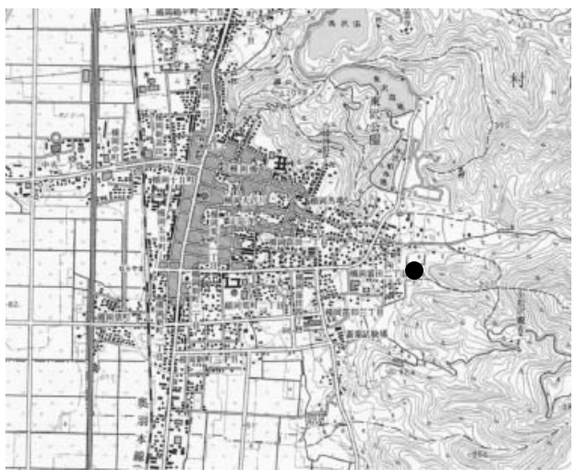
作野（さくの）遺跡

遺跡番号　N o.655
調査次数　第２次
所在地　村山市大字楯岡字笛田
北緯・東経　38 度 28 分 34 秒・140 度 24 分 13 秒
調査委託者　村山市
調査原因　徳内・シーボルトライン道路改良事業
調査面積　1,400 ㎡
現地調査　平成 21 年６月９日～７月 29 日
調査担当者　植松暁彦（調査主任）・後藤枝里子
調査協力　村山教育事務所・村山市教育委員会・県教育庁文化財保護推進課
遺跡種別　集落跡
時　　代　縄文時代・平安時代
遺　　構　竪穴住居跡・貯蔵穴跡・柱列・谷跡等
遺　　物　縄文土器・石器・土偶・石棒・石冠・須恵器等（文化財認定箱数：65 箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

作野遺跡は、大沢川左岸の扇状地扇頂部に位置し、地元周辺においては、古くから土器や石器が採集される地域として知られ、昭和 53 年 (1978 年) に正式に県の遺跡として『山形県遺跡地図』に登録された。

その後、山形大学が、宅地造成などに伴い、昭和 54 年 (1979 年) にトレンチによる発掘調査を実施し、竪穴住居跡２棟や多量の遺物を発見した。更に、県教育委員会において、昭和 57・58 年 (1982・1983 年) に県企業局の送水管工事に伴う面的調査（第１次調査）を行い、竪穴住居跡２棟と、多量の土器さらに石器を廃棄した「捨場」を発掘した。これら成果は、県内で類例が少ない縄文時代終末の縄文時代後期～晩期 (約3,000 年前) の拠点的な集落跡として報告され注目された。

今回の調査は、国の補助事業でもある村山市の徳内・シーボルトライン道路改良事業に伴う発掘である。
調査区は、昭和 57・58 年の第１次調査の東側にほぼ並行する約 1,400 ㎡（長さ約 87.5 m×幅約 16 m）で、遺跡範囲の最も東側の山際にあたり、標高が高く扇状地の最頂部付近にあたる。

調査では、調査区中央から南半部にかけて、全体に縄文時代後・晩期の貯蔵穴群が 10 数基、縄文時代最終末～弥生時代初頭の竪穴住居跡１棟などが発見された。
遺物では、これら遺構に伴い縄文時代各期の縄文土器や石器などが多量に出土し、土偶や石棒・石刀、石冠、など祭祀具も出土した。

特に縄文時代最終末～弥生時代初頭の竪穴住居跡は、県内でも数少なく、出土遺物からは他地域の影響も考えられる土器や石製品も出土し、本県内陸部の弥生文化の初現を考える上で貴重な資料が得られた。
なお、谷などから平安時代（約 1,050 年前）の須恵器や土師器など土器も若干出土した。

遺構と遺物

作野遺跡は、従来の調査から縄文時代後期末～晩期(約 3,000 年前)の県内でも有数の拠点的集落と知られる。今回の調査は、検出された遺構では、大きく縄文時代後期～晩期（約 3,000 年前）の貯蔵穴群と、縄文時代終末～弥生時代初頭（約 2,700 年前）の竪穴住居跡１棟が、二つの谷に挟まれた台地上で発見された。

貯蔵穴群は、小谷に挟まれた狭い台地上に、直径・深さが 0.5 ～１mで、断面形が下膨れで袋状を呈し、十数基以上が検出された。全体には、Ａ群：直径・深さが１m前後で下膨れする長大タイプ、Ｂ群：直径が 0.5 ～１mだが深さが 0.5 m未満と浅く袋状タイプ、Ｃ群：直径が１m前後と大きいが深さが 0.5 ～１mで、断面形が船底状タイプに大別される。出土土器からは、Ａ群（縄文時代後期末葉）→Ｂ群（同晩期前葉）→Ｃ群（同晩期中～後葉）の時期変遷が推測される。

これらから当時の貯蔵穴は、時期毎に形態などを変えながらも、扇状地の扇頂部付近に集中して作られていたことが分かる。これは、木の実などを蓄えるのに温度変化の少ない地下の中でも、さらに湿気を防ぐために標高の高い山際の扇頂部を選地したからと考えられる。

これらの貯蔵穴の遺物では、特にＡ・Ｂ類の貯蔵穴の埋没中に完形の注口土器や深鉢が単独で置かれた状態で出土し、当時の祭祀などの可能性も推測される。これら土器には､関東地方などの文様との類似性もうかがわれ、当時の他地域との交流なども推測される。

一方、竪穴住居跡は、東日本でも数少ない弥生時代初頭のもので、直径３mほどで、住居の半分は調査区外にある。周溝の切り合いなどから新旧２時期の建替えが推定される。遺存状況の良い内側の新しい住居跡は、中央部に炭化物を多く含み、外縁に拳大の川原石が廻る地床炉や、主柱穴、二重の周溝などが確認された。

出土遺物は、住居埋土から縄文時代晩期後葉の系譜を引く工字文や変形工字文を付す深鉢、鉢、浅鉢、壺、高坏などがまとまって出土し、宮城県や青森県の土器形態と類似する土器群も出土した。他に、扁平な器形で胴部上半に波状隆帯を廻らす、東北地方では類例が少ない特殊な壺が出土し注目される。また、祭祀関連の北陸地方などに主体的な石冠、薄い平面三角形で両側縁に石鋸状の刻みを有する特異な石製品も出土した。

調査区近景（西から）

貯蔵穴跡の精査状況（北西から）

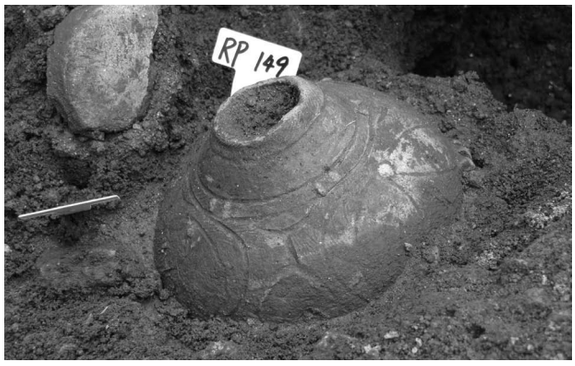
ＳＫ 18 貯蔵穴の注口土器出土状況（西から）

調査説明会（東から）

貯蔵穴群の完堀状況 (北から)

ＳＫ 24 貯蔵穴の注口土器の出土状況 (東から)

ＳＫ 18 貯蔵穴の完堀状況 (南から)



ＳＫ 18 貯蔵穴の注口土器の出土状況 (北から)

まとめ

作野遺跡は、遺跡範囲の規模やこれまでの調査内容から、縄文時代後～晩期 (約 3,000 年前) の県内でも有数の拠点的集落と考えられる。今調査の調査では、従来の成果に加え遺構全体で、遺跡範囲の最も山際に、縄文時代後期末～晩期全般の各時期に、貯蔵穴群が集中して構築されることが特徴としてあげられる。これは、過去の同遺跡での調査と併せることで、県内では数少ない当時の集落構成を把握できることが成果の一つである。

具体的には、谷に挟まれた扇状地扇頂～扇央部にかけてのやや広い台地上に小型の竪穴住居群 (昭和 54・58 年調査) が配置される。そして、その外側（東側）にあたる標高が最も高い扇状地最頂部付近の狭い台地上に、食糧保存のため繰り返し貯蔵穴を構築したようである。

なお、縄文時代最終末～弥生時代初頭 (約 2,300 年前) には、竪穴住居跡も標高が高く谷に近い場所に建てられ、また住居の床面付近から祭祀具の石棒や石冠が出土し、一般住居とは異なる性格も推測される。

出土遺物では、貯蔵穴の埋没中に、縄文時代後期末（瘤付土器Ⅳ期）～晩期初頭（大洞Ｂ式期）の完形の注口土器や深鉢が単体で置かれた状態で出土し、祭祀などに関わる可能性も考えられる。更にこの中の一部には、関東地方とも類似性のある文様をもつ注口土器が出土し、当時の広域交流がうかがえる良好な資料が得られた。

他に今調査では、従来の調査で縄文時代後・晩期のみ出土していた同遺跡から、さらに次期の弥生時代にかかる土器群も竪穴住居跡などから数多く出土し、本県内陸部の最古段階の稲作文化の伝播や転換期を考える上で貴重な資料が得られ、大きな成果といえよう。

この土器群は、全体に在地の縄文時代晩期末（大洞Ａ’式期）の変形工字文の文様を主とするが、一部弥生時代初頭の青森県（砂沢式期）や宮城県（青木畑式期）など他地域の形態に類似するものもある。

特に扁平胴部で胴上半部に波状隆帯を廻らす細口壺は、口縁部や胴下部地文が在地の同晩期の系譜を引継ぐが、他の部位文様や形態は在地での系譜が追えず、他地域の福島・新潟県の影響も考えうる特殊壺で注目される。これは、当時の北と南の文化が日本海ルートで、庄内地方の生石２遺跡（弥生時代初頭）などを経由し、最上川を南下し、内陸で在地化し造形された産物と考えたい。

ＳＴ 40 竪穴住居跡の完堀状況 (東から)

ＳＴ 40 竪穴住居跡の遺物出土状況 (北東から)

ＳＴ 40 竪穴住居跡跡出土の蓋と高坏台 (西から)

ＳＴ 40竪穴住居跡の波状隆帯壺の出土状況(西から)

波状隆帯を有する壺（写真上：上から、写真下：横から）

土偶（顔・手足が折損。胸と腹部に膨らみがある）

石冠・石鋸状石製品・三脚石製品